

左の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、文章中の傍点は原文についているものです。

たとえばどんなにおいしい食事でも食べられる量は限られている。腹八分目という昔からの戒めを破って食べまくったとしても、食事はどこかで終わる。いつもいつも腹八分目で質素な食事というのはさびしい。やはりたまには豪華な食事を腹一杯、十二分に食べたいものだ。これが浪費である。浪費は生活に豊かさをもたらす。そして、浪費はどこかでストップする。

それに対し消費はストップしない。たとえばグルメブームなるものがあつた。雑誌やテレビで、この店がおいしい、有名人が利用しているなどと宣伝される。人々はその店に殺到する。なぜ殺到するのかというと、だれかに「あの店に行ったよ」と言うためである。

当然、宣伝はそれでは終わらない。次はまた別の店が紹介される。またその店にも行かなければならない。「あの店に行ったよ」と口にしてしまった者は、「えええ？ この店行ったことないの？ 知らないの？」と言われるのを嫌がるだろう。だから、紹介される店を延々と追い続けなければならない。

これが消費である。消費者が受け取っているのは、食事という物ではない。その店に付与された観念や意味である。この消費行動において、店は完全に記号になっている。だから消費は終わらない。

浪費と消費の違いは明確である。消費するとき、人は実際に目の前に出てきた物を受け取っているのではない。(中略)なぜモデルチェンジすれば物が売れて、モデルチェンジしないと物が売れないのかと言えば、人がモデルそのものを見ていないからである。「チェンジした」という観念だけを消費しているからである。

ボードリヤール(中略)は消費される観念の例として、「個性」に注目している。今日、広告は消費者の「個性」を煽り、消費者が消費によって「個性的」になることをとめる。消費者は「個性的」でなければならぬという強迫観念を抱く(いまの言葉ではむしろ「オンリーワン」といったところか)。

問題はそこで追求される「個性」がいったい何なのかだれにも分からないということである。したがって、「個性」はけっして完成しない。つまり、消費によって「個性」を追いもとめるとき、人が満足に到達することがない。その意味で消費は常に「失敗」するように仕向けられている。失敗するというより、成功しない。あるいは、到達点がないにもかかわらず、どこかに到達することがもめられる。こうして選択の自由が消費者に強制される。

消費社会を相対的に位置づけるために、それとは正反対の社会を紹介しよう。ボードリヤールも言及しているが、人類学者マーシャル・サールズ [1930-] は「原初にあふれる社会」という仮説を提示している。これは現代の狩猟採集民の研究を通じて、石器時代の経済の「豊かさ」を論証したものである。

狩猟採集民はほとんど物をもたない。道具は貸し借りする。計画的に食料を貯蔵したり生産したりもしない。なくなったら採りにいく。無計画な生活である。

彼らはしばしば、物をもたないから困窮していると言われる。そして、それは彼らの「未来に対する洞察力のなさ」こそが原因であると思われる。つまり、計画的に貯蔵したり生産したりする知恵がないために十分に物をもっていないとして、「文明人」たちから憐れみの目で眺められている。

しかし、これは実情から著しくかけ離れている。彼らはすこしも困窮していない。狩猟採集民は何ももたないから貧乏なのではなくて、むしろそれ故に自由である。「きわめて限られた物的所有物のおかげで、彼らは日々の必需品に関する心配からまったく免れており、生活を享受しているのである」。

また、彼らが未来に対する洞察力を欠き、貯蓄等の計画を知らないのは、知恵がないからではない。彼らのような生活では、単に未来を思い煩う必要がないのだ。

狩猟採集生活においては少ない労力で多くの物が手に入る。彼らは何らの経済的計画もせず、貯蔵もせず、すべてを一度に使い切る大変な浪費家である。だが、それは浪費することが許される経済的条件のなかに生きているからだ。

したがって狩猟採集民の社会は、一般に考えられているのとは反対に、物があふれる豊かな社会である。彼らが食料調達のために働くのは、だいたい一日三時間から四時間だという。サーリンズは、農耕民に囲まれていたけれども農業の採用を拒否してきた、ある狩猟採集民のことを紹介している。なぜ彼らは農業の採用を拒んできたのか？ 「そうならばもっとひどく働かねばならない」からだそうである。

もちろん狩猟採集民を過度に理想化してはならない。狩猟採集民もうまく食料調達ができないことはあろうし、環境の変化によって容易に困窮に陥ることはあろう（しかし、農耕民の方がその可能性が高いとも言えるのだが……）。

重要なのは、彼らの生活の豊かさが浪費と結びついているということである。彼らは贅沢な暮らしを営んでいる。これが重要である。ボードリヤールやサーリンズも言うように、浪費できる社会こそが「豊かな社会」である。将来への気づかいの欠如と浪費性は「真の豊かさのしるし」、贅沢のしるしに他ならない。

消費社会はしばしば物があふれる社会であると言われる。物が過剰である、と。しかしこれはまったくのまちがいである。サーリンズを援用しつつボードリヤールも言っているように、現代の消費社会を特徴づけるのは物の過剰ではなくて稀少性である。消費社会では、物がありません。物がなすすぎるのだ。

なぜかと言えば、商品が消費者の必要によってではなく、生産者の事情で供給されるからである。生産者が売りたいと思う物しか、市場に出回らないのである。消費社会とは物があふれる社会ではなく、物が足りない社会だ。

そして消費社会は、そのわずかな物を記号に仕立て上げ、消費者が消費し続けるように仕向ける。消費社会は私たちを浪費ではなくて消費へと駆り立てる。消費社会としては浪費されては困るのだ。なぜなら浪費は満足をもたらししてしまうからだ。消費社会は、私たちが浪費家ではなくて消費者になつて、絶えざる観念の消費のゲームを続けることをとめるのである。消費社会とは、人々が浪費するのを妨げる社会である。

消費社会において、私たちはある意味で我慢させられている。浪費して満足したくても、そのような回路を閉じられている。しかも消費と浪費の区別などなかなか思いつかない。浪費するつもりが、いつのまにか消費のサイクルのなかに閉じ込められてしまう。

この観点は極めて重要である。なぜならそれは、質素さの提唱とは違う仕方での消費社会批判を可能にするからである。

しばしば、消費社会に対する批判は、つましい質素な生活の推奨を伴う。「消費社会は物を浪費する」「人々は消費社会がもたらす贅沢に慣れてしまっている」「人々はガマンして質素に暮らさねばならない」。日本でもかつて「清貧の思想」というのが流行^{はや}ったがまさしくこれだ。

そうした「思想」は根本的な勘違いにもとづいている。消費は贅沢などもたらさない。消費する際に人は物を受け取らないのだから、消費はむしろ贅沢を遠ざけている。消費を徹底して推し進めようとする消費社会は、私たちが浪費と贅沢を奪っている。

しかも単にそれらを奪っているだけではない。いくら消費を続けても満足はもたらされないが、消費には限界がないから、それは延々と繰り返し返される。延々と繰り返されるのに、満足がもたらされないから、消費は次第に過激に、過剰になっていく。しかも過剰になればなるほど、満足の欠如が強く感じられるようになる。

これこそが、二〇世紀に登場した消費社会を特徴づける状態に他ならない。消費社会を批判するためのスローガンを考えるとすれば、それは「贅沢をさせろ」になるだろう。

(注) ○ボードリヤールⅡフランスの社会学者。主著に『消費社会の神話と構造』など。一九二九～二〇〇七。

問 この文章の内容と明らかに合致しないものを一つ選べ。

- ① ふだんは質素に暮らしていても、たまに浪費することができれば、その人の生活は豊かになる。
- ② 狩猟採集民が農業にたずさわることを選択しないのは、彼らが既に豊かな社会を実現しているからである。
- ③ 真に豊かな暮らしを送るためには、食料に困ることのないように計画的な生活を送ることが大切である。
- ④ 消費社会では、人々は欲しい物を手に入れても満足することができずに、常に欲望をかき立てられている。

【解説】

◇本文の構成

第一段落（形式段落1～5）

・浪費と消費との違い

浪費⇨生活に豊かさをもたらし、どこかでストップするもの。

消費⇨あるものに付与された観念を追い続けるだけで、いつまでも終わらないもの。

第二段落（形式段落6～7）

・消費される代表的概念としての「個性」

第三段落（形式段落8～16）

・石器時代の「豊かさ」

浪費が可能な贅沢な暮らし。

第四段落（形式段落17～25）

・消費社会の「貧しさ」

浪費が奪われた、贅沢さのない暮らし。

第五段落（まとめ・形式段落26）

消費社会批判

←

「贅沢をさせる」

【要旨】

浪費は生活に豊かさをもたらし、満足感を得ていつか終わるものだが、消費は観念や意味を受けとるだけで、いつまでも満足感が得られず、終わることがない。そういう意味では浪費が可能であった石器時代の方が、現代の消費社会よりも豊かであったともいえる。際限なき消費を見直すことが必要である。

【解答】

③

浪費と消費の違いが理解できていれば、それほどむずかしい問題ではない。

①は筆者の言う浪費の中身を正しく説明している。

②も狩猟採集民が実は豊かな社会を実現していた、という筆者の主張どおりである。

④も筆者の言う現代消費社会の問題点を正しく捉えた選択肢である。

③だけが、「真に豊かな暮らし」の中身として、「計画的な生活を送ること」を挙げているが、これは本文の中で繰り返し否定されてきたことである。